

國學院大學學術情報リポジトリ

英国飲酒社会の病理

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 健, Noro, Ken メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000018 |

英国飲酒社会の病理

野呂 健

序

英語を教えることを生業とし、長年イギリスという国と付き合いっていると、頭にこびりついて離れない疑問、いや疑念がある。それは、「イギリス人はなぜあんなに大量に酒を飲むのか、なぜあのような飲み方をするのか？」ということである。この疑念は、イギリス人を夫に持つアメリカ人著述家にも共有されている (Lyll 2008参照)。その記事では、英国の節度のない飲酒が a national sport (国民的娯楽) と捉えられている。量だけならウオッカで男性の平均寿命を短くしているロシアの方がすごいかもしれないし、李白、白居易といった酒のみ詩人の伝統をもつ中国でも、アルコール度数の高い酒で乾杯を際限なく繰り返すことが知られている。また、EU内部でも、一人あたりのアルコール消費量がイギリスよりも多い国としてビール王国、チェコ、ドイツ、オーストリアなどをあげることができる (キリン食生活文化研究所 (2012: 4))。そういう国々に関してあまり飲酒問題が取りざたされていないのは、単に情報が入りにくいからであろうか。それとも、筆者の問題意識がそういう国に向いていないからであろうか。いずれにせよ、英国人の飲酒は世界の耳目を集める。

1. Dipsomaniac (飲酒狂) へのいざない

イギリス人の大量飲酒は、医学上の調査からも明白である。滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学教室の報告 (報告番号160) は、Hughes et al (2011) の要旨をまとめたものである。同調査は、オランダ、スロベニア、スペイン、イギリス4カ国の都市部における16歳から35歳の飲酒者838名の実態調査で、インタビュー時の呼気中の血中アルコール濃度を指標としている。イギリスでは61.4%が飲酒しており (スペイン59.6% , オランダ56.2% , スロベニア34.8%)、血中アルコー

ル濃度の増加が他国よりもイギリスにおいて目立つ。結論として、「他の都市と比較して、イギリスの都市の対象者は、節度のある飲酒に比べて大量飲酒が目立った。イギリス人の飲酒様式は、高い健康リスクと関連していた。」(下線は筆者による。)と述べられていることから、イギリスにおいて飲酒が国家的病であることが裏付けされている。

「ビールはイギリス人にとって生得権の一部としての生活必需品である (“a common necessity which Britons deem to be part of their birth-right”）」(Joseph Massie, *Calculation of the Present Tax*. 2nd ed. London 1761. Picard p.124 に引用) という主張を認識しない限り、アルコールに対するイギリス人の振る舞いを適切に理解することは難しい。酒を生得権の一部と主張する人は日本にはめったにいない。「酒なくて何の人生か」といった主観的、情緒的な表現がせいぜいである。

社会史的にイギリスの飲酒を見れば、ロンドンやその他の工業都市の人口過密と慢性的な貧困が支配した生活環境そのものが、飲酒狂の温床であった。急激な都市化の結果としての非人間的な生活環境、パブという社会文化的環境、アルコールに寛容すぎる家庭ならびに社会環境、さらには自分の生き方は自分で決定し、お上の言うことなど聞きたくないという国民性等を勘案すると、英国の飲酒はやはり特異な存在である。Ackroyd (2001: 346) によると、13世紀においてすでにロンドンは「患者の節度を越えた飲酒 “the immoderate drinking of the foolish”」で悪評高かったし、14世紀初頭には、354軒の酒場 (tavern) と1334軒の醸造所 (breweries) があった。ロンドンは、酒に不自由しない場所であった。

英国飲酒社会の基盤を形成するパブの在り様については無数の文献があるが、ジャック・ロンドンの『どん底の人々：ロンドン1902』(1903)の描写を借りて説明しよう。同書は著者ロンドンが、イースト・エンドで貧困者になりすまして、その生活を体験した経験に基づいている。信じがたいほどの慢性的な極度の貧困、sweat shopを連想させる狭隘・過密・不衛生、奈落の底のような家庭生活、人間性の崩壊は目を覆うばかりであったろう。知性と道徳の存在余地はない。一室居住を余儀なくされた労働者は、帰宅しても雑居房のような家庭に居場所はない。彼らは、光の見えない家庭生活から逃げ出して、誘蛾灯のような「賑やかで明るい」(前掲書p.312)パブに向かい、いつか安酒をあおる。この行動を誰が非難できようか。

パブはいたるところにある。通りの角ごとに、いや、それに加えて、角まで行く途中にも立っていて、男ばかりでなく、女の客も同じくらい多く出入りしている。おまけに子供たちの姿まであり、彼らは父親や母親が腰を上げるのを待つ間、大人のコップから酒をすすりながら、品のない話、粗野な言葉に耳を傾け、次第にみだらな空気に染まって感化を受けていくのである。(ロンドン 1903: 319-320)

ここには、過剰な数のパブ、パブを軸に回る日常生活、子供も含めた節操のない飲酒の実態が明瞭に描かれている。

最も劣悪なのは、ロンドン、マンチェスター、リバプールなど産業・工業地域における労働者の居住環境であった。藤本（2000: 22-24）によると、地下穴蔵居住と木賃宿が最悪であった。

木賃宿は疾病と退廃の温床となった。年齢、性の区別なしに、また体裁への配慮なしに、小さい、劣悪なアパートに群がったのである。お互いに見も知らぬ両性の人たちによって無差別に使用され、すべて害虫に群がられ、しばしば酔っぱらって、悪臭の立ちこめる空気の中に横たわる。そして疾病だけでなく、犯罪・売春の温床となった。（藤本 2000: 24）

まさにスラム街と言える状況であった。しかし、中世以来の居住環境の歴史を見ると、このような状況は必ずしも特別に異常ではなかった。ワースリー（2013: 1, 8）によれば、「かつて寝室は雑魚寝状態でやすむ半ば他人との公共の場」であったし、「中世の人々はほとんど誰もが大勢の人と交じり雑魚寝をした。プライバシーなど眼中になかった。」のである。

地球上のたいていの文化に何らかのアルコール飲料があり、その飲み方、飲酒の習慣は千差万別である。そのなかでもイギリス人の異様な飲み方の指摘として、すでに竹之内（2002: 31）で引用されているのではあるが、ベンジャミン・フランクリンの言葉も外国人の素朴な驚きとして今でも引用に値するであろう。彼はその *Autobiography*（『自叙伝』）の中で次のように記している。

My companion at the press, drank every day a Pint before breakfast, a Pint at breakfast with his Bread and Cheese; a Pint between Breakfast and Dinner; a Pint at Dinner; a Pint in the Afternoon about Six o'Clock, and another when he had done his Day's -Work. I thought it a detestable Custom. But it was necessary, he supps'd, to drink *strong* Beer that he might be *strong* to labor.
(Franklin 1986: 50)

『自叙伝』は18世紀後半に書かれたものであるが、ピューリタンの伝統の中で育ち、仕事中は「水」を飲んでいた17歳のフランクリンからすれば、*strong beer*こそ強健な体を作ると信じ込んで、工場労働者が一様にビールを朝から晩までがぶ飲みする姿（*Guzzlers of Beer*）はさぞかし異様に映ったであろう。その常軌の逸し方を手掛かりとして、英国人の心性を読み解いていくことは、社会文化理解の上で有益な試みであろう。

なお、スールニア (1996:11) が以下の引用で述べている通り、飲酒様式と文化には深いつながりがある。

飲酒の仕方は集団ごとの文化に関連している。飲み方には仕来りというものがあり、人々は互いに他人が正しい飲み方をするかどうか見張っている。他と違う飲み方をする者、特に飲みすぎる者は、違反を犯すことになる。酔っ払いは、不敬な冗談や暴力で社会のヒエラルキーを危うくし、秩序を脅かし、掟を愚弄し、性的禁忌に刃向い、社会の基盤である家族制度を軽視する。(スールニア 1996: 11)

イギリスにおける過度の飲酒を文化の一側面としての「しきたり」と捉えるか、社会の「悪弊」と捉えるかによって意味合いはかなり異なってくる。文化を精神のメンタルソフトウェア (mental software of the mind) と定義すると (ホフステッド 1995: 3-4)、そこには「文化なのだから仕方がない」とする許容の態度が見え隠れする。ラウンドもビンジ・ドリンキングも未成年飲酒も、眉をひそめられても、「文化的しきたり」という隠れ蓑をまもってしまう。「不倫は文化だ」と主張することさえできる。社会悪や悪弊とは言うが*文化悪とは普通言わないことから、本論文では、あえて飲酒文化とせずに飲酒社会とタイトルを付け、英国飲酒社会の根源の解明に取り組む。

2. 病根としてのBinge Drinking、そして際限のない飲酒へ

英国の飲酒の様態をもっとも端的に表す言葉は‘Binge Drinking’ (バカ飲み) であろう。Alcohol Consumption Factsheet (2013: 13) によると、Binge Drinking は ‘heavy episodic drinking’ (短時間の大量飲酒) とも言われるが、「24時間以内に、男性の場合少なくとも8単位。女性の場合少なくとも6単位、すなわち、低リスク限度 (low risk limits) の最大量の2倍を消費すること」と定義されている。アルコール1単位 (unit) は、純粋アルコール8グラムに相当する。

Binge drinkingという言葉が、とくにそのネガティブな意味に焦点を当てて、いつ頃から人の口に上り始めたか定かではないが、英国という飲酒社会・文化の病根を一言で表すのうってつけの言葉である。あえてその出所を探ってみると、Stafford, Nottingham, Lincoln, Northamptonあたりの俗語のようである。Joseph Wright (編) の *English Dialect Dictionary* (1962) によれば、bingeは「(水漏れをなくすために木製の船を) 水に浸す、水につける (soak)」の意味を持っていて、それが比喩的に用いられ、「どっぷりとつかうように深飲みする (to drink deeply)」の意味で使われたあたりが起源であろう。Nhp.の用例として、A man goes to the ale-house to binge himself. があがっている。

Lyall (2008), Kirby (2013) いずれも binge drinking をキーワードとして論を進めている。しかし、問題の核心は、何が英国にビンジ・ドリンキングを蔓延させてきたかである。「人びとを飲酒に向かわせる不幸が消えない限り、飲酒とその弊害も消えはしないだろう。」(ロンドン：p.324) とジャック・ロンドンは述べている。17・18世紀なら貧困と貧困による悲惨な生活が最大の原因と断定できたであろう。先ほども述べたが、そこには産業革命による急激な環境と社会構造の変化、都市化の悪影響が顕著にみられ、人々は無力感と閉塞感にさいなまれていた。

また、Amis (2008: 4) は、特に都会生活の緊張とストレス (strain and stress) を指摘している。Hitchings (2013: 32) によれば、一体感や愛情が感じられるとオキシトシン (oxytocin) が分泌され、その結果ドーパミン (dopamine) が分泌されて、人間は喜びや快楽を感じやすくなるが、ストレスはオキシトシンの分泌を阻止し、結果的に幸福感を感じにくくなる。誰もが誰をも知っている農村とは異なって、都会生活はストレスとフラストレーションに満ちている。たび重なる未知の人との突然の対面において常に緊張を強いられるが、それを緩和する手取り早い手段がアルコールである。ちなみに20世紀になったばかりのロンドンは次のように描かれている。

ロンドンの大通りはどこを通ってもみじめな貧困の証拠にお目にかからぬわけにはいかないとと言えるだろう。そしてロンドンのほとんどの地点からでもおよそ五分歩けば必ずスラム街に出してしまうのだ……通りにいるのはこれまで見たのと違う種類の人たちで、みな背が低く、いかにもみじめな様子だったり、全身がビール浸しになった様子だった。……あちらこちらに酔っ払った男や女がふらふら歩いていて、大声や小声の口論の下品な声が聞こえてきて、むかむかするような雰囲気だった。(ロンドン 1903: 20-22)

しかし、20世紀21世紀になって社会環境・時代風潮・教育体制が変わっているのに飲み方の根本は変わっていない。William Hogarthによる‘Gin Lane’ (1751) やGeorge Cruikshankによる‘The Gin-crazed Girl Commits Suicide’ (1848) にみられる光景は、Charles Dickensの『ボズのスケッチ』やサムエル・ピープスの日記、あるいはWilliam BlakeのSongs of Experience の一節“London”を重ね合わせると、一瞬を切り取った静止画像ではあれ、かなり現実に近いものと推測される。貧困者の集団は、酒をあおる以外にすることが何もなくあった。

筆者は2002年4月から2003年3月まで、國學院大學国外派遣研究委員としてロンドンのUniversity Collegeで研究をする機会を与えられた。その折に長年の疑問を解決する糸口が見つかるかもしれないと考えて、若干の実地体験を試みた。英国のパブは法律で開店時間が決まっていて、午前11時に開店する。日本のほんの一部の飲み屋も朝からやっちはいるがそれはあくまで例外である。イギリスでは、

全国津々浦々のパブが一斉に開店し、「さあ、飲んでいいぞ、飲め！」となるわけだ。本当に11時から客が入っているのかどうか確かめるために、Kingsley Amisの語彙によればlocal（「地元のパブ」）(Amis 2008: xv)と思われるところに行ってみた。11時を若干過ぎたところであったが、既に先客が3名いてだいぶピッチが上がっていた。なにしろウイスキーを飲んでチェイサーがビールと言う飲み方であるから、どんどん酔いが進む。安く、手取り早く酔っ払うための飲み方としか言いようがない。ほとんどが年金生活者と思しき人々で、アルコール依存症の疑いが強い常連であった。ちなみに、東洋人のまともな年齢の勤め人のようなものがそんなところに入り込んだわけなので、胡散臭い目で結構じろじろ見られた。私自身はそれなりに飲める方だが、朝11時にビールを1ポイント心地よく飲める体ではないということが判明した。その点では、私は後述のWinston Churchillにはなれない。習性性は恐ろしい。あるスポーツの競技会でも、昼食時に審査員 (adjudicator) がみんなワインを飲んでいて。誰も眉をしかめないし、咎めもしない。「そんなものだ」と誰もが思っている。

筆者がロンドンに滞在していた2002年は、エリザベス二世のGolden Jubileeの年で、派手なお祭りがたくさん行われた。女王がバッキンガム宮殿からパレードした日の夜、その道筋隣のSt. James's Parkは、肉林はないがまさに酒池であった。翌朝、好奇心からその公園にいったら見ると、敷地全体にわたって何百本、何千本というシャンパンの瓶が転がっていて（ワインの瓶は3割くらいか）、廃品回収車が回って、うんざりしたような顔の清掃人が、空き瓶を荷台に放り込んでいた。空き瓶を自宅に持ち帰る人間など一人もいない。イギリス飲酒文化の残骸が、文字通り死屍累々、海岸に打ち上げられた瓦礫のように横たわっていた。ちなみに、英国人はビール・エール・ビター好きと言われていて、実は世界で指折りのシャンパン好き国民である。

また、朝食が、食卓革命と時に言われる食事の形態の変化の後でパンとティー中心になる以前は、肉とウイスキーもしくはビール、エールという具合に朝からアルコールの入る社会であった。ウィンストン・チャーチル首相もどうやら朝からアルコールを摂取していたようである。彼の残した名言集に、“When I was younger I made it a rule never to take a strong drink before lunch. It is now my rule never to do so before breakfast.” (Humes 1995: 3) とある。Grice流の会話の含意の考え方からすれば、昼からは強い酒を飲んでいて、昼前は薄い酒を飲んでいてことになる。その上、“All I can say is that I have taken more out of alcohol than it has taken out of me.” (Humes 1995: 3) ともある。一国の宰相が酒を朝から飲むことを隠しめせず、酒の効用をおおびらに公言する度量の大きさ、それをことさら騒ぎ立てずに受け止める国民は偉大である。国中がぎすぎすしないように、ユーモアはこういうところに使わなくてはいけない。飲んででも抑えるべき勸所をはずしていないことが重要である。だから、チャーチルはシャンパンについ

てこう述べている：“A single glass of champagne imparts a feeling of exhilaration. The nerves are braced, the imagination is agreeably stirred, the wits become more nimble. A bottle produces a contrary effect.” (Humes 1995: 15) 飲みすぎはちゃんと戒めている。グラス一杯なら人生を幸福にし、ボトル一本飲んだら人は破滅に向かう。現代の英国において問題飲酒にふける人々は、抑えるべきところを抑えていない無軌道で無粋な飲み方に終始している。ただし英国の名誉のために言えば、この手の問題飲酒にふける輩は、どこの国にも一定程度は存在する。ただ、あまり目立たない。サッカーのフーリガンやヴァンダリズムなどと結びつかないからであろうか。

英国人はパブでよく飲む。しかしなぜあのように、店の中と言わず外と言わず、夏でも冬でも、立って飲むのだろう。彼らは疲れないのだろうか。また、彼らはつまみというものをほとんど食べない。せいぜいチップス程度である。繊細な味覚など育ちようがないし、飲むために飲んでるとしか言いようがない。グループで行ったら、平等というカフェアーの精神に支配された「ラウンド」という魔物のような仕組みに従って、ひたすら飲み続ける。パブの存在は、大陸のカフェやバルとまるで異なる。カフェやバルが公的・私的世界、個人と家族の境界の微妙に入り混じった場であるのに対して、パブはもっぱら飲酒と議論のための閉ざされた空間である (Kirby 2013)。

英国人飲酒者は、酔うために飲むという単純な哲学を崩すことをしない。「酔わないように少し腹に入れていこう」などは、彼らにとっては論理的矛盾である。しかも効率よく手取り早く酔うためにどのような飲み方をすればいいか心得ている。パブで飲むことはほとんどカーニバル化している。毎晩、11時が近づくとカーニバルが盛り上がる。“Last orders!” “Time at the bar!” “Time, gentlemen please.” ほど厳格に施行され守られる命令はない。人々は残りの10数分で飲めるだけ飲もうとカウンターに殺到する。

今年ブラジルでワールドカップが行われたが、試合開始がイギリス時間で午後11時であることがパブでの応援に不都合であると判明した。パブは午後11時に閉店と法律で決まっている。しかし、イギリス政府は、イギリスチームの試合がある時に限り午前1時までの営業を特例的に認めた。サッカーの試合のために法律を曲げることをいとわないのはサッカーの発祥の地ゆえであろうが、そうしなかつたら暴動さえ起こしかねない民衆の無言の圧力も背景にあったろう。ビールはもともと大衆と労働者の飲み物であった。もっともPrince WilliamとKate Middletonの結婚式の時も4月29日金曜日から連続2晩、午前1時までの営業が認められた。金土日と人びとは飲み続けた。午前1時に大量の酔っ払いが市内に放り出される喧噪と恐怖はどのようであったろう。

3. 飲酒の歴史に見る暗黒：もはや遺伝子の問題か

飲酒は英国にとって国の歴史と同じだけの長さを持つ問題であり、イギリス人の祖先であるゲルマン系の人々の節制のない飲酒が、ヨーロッパのなかで際立っていた。後述するGin Crazeと比較した場合、さして大量のアルコール飲料が生産されたとも思われない時代から、その飲酒はすでにある種の際立ちを見せていた。スールニア (1996: 27) によれば、ゲルマン民族やサクソン族は、はじめは蜂蜜酒 (mead) を、次いで大麦を原料とする (ホップなしの) ビールを飲んでいたが、「恒常的かつ集団的アルコール中毒」とまでは言えないが、かなり大量の酒を飲んでいたのは間違いないようだ。ローマ人から見た古代ゲルマン人の記述であるタキトゥスの『ゲルマニア』の第23節に次のように記されている。

飲料には、大麦または小麦より醸造られ、いくらか葡萄酒に似て品位の下がる液がある。……河岸に近い者たちは、ぶどう酒をさえ購っている。食物は簡素であって、野生の果実、新しいままの獣肉、あるいは凝乳。彼らは調理に手をかけず、調味料も添えずに飢えをいやす。しかし彼らは渴き (飲酒) に対してこの節制がない。もしそれ、彼らの欲するだけを給することによって、その酒癖を擅にせしめるなら、彼らは武器によるより、はるかに容易に、その悪癖によって征服されるであろう。(タキトゥス 2012: p.108、下線は筆者による。)

イギリス人の飲酒の悪癖の原点、「節制のなさ」がすでに明確にここに表れている。もちろんこの記述はローマ人が異国の民族ついていくらかの「よそ者意識」「見下した態度」を持って書いたものであろうから、いささか割り引いて考える必要はある。しかし、ローマ的な尺度がどのようなものであれ、「節制のなさ」が際立っていたのであれば、現代の飲酒癖につながる萌芽として無視できない。飲酒狂 (dipsomaniac) の種は、英国誕生以前から、英国人の体内に蒔かれていた。

ブドウを原料とし、生産量が少なく格付けなどが問題になるワインと比較した場合、麦を原料にしたビール類は一般民衆の普通の飲み物であった。しかし、ビール発祥の地である古代メソポタミアにおいて、ビールが「文明人の証」としてみなされ、叙事詩「ギルガメシュ」の中で野人エンキドウがビールを飲むことによって文明人になるというくだりがある。酩酊という不可思議で超自然的な作用が野獣から人間への変容を橋渡ししていた。一方、エジプトのピラミッド建設に当たっては、労働者に対して「固いビールであるパンと液体としてのビール」(Standage 2006: 17) が、賃金として与えられていたことからすると、ビールは労働者直結であり、貨幣と同様の社会的な地位さえもっていた。

イギリスの富裕層は、かつて占領していたフランスのアキテーニュ地方からの高級ワインを楽しんでいたが、庶民は変わることなくビールを飲んでいた。スールニア (1996: 33) に示されているように、既に13世紀においてビールによる喧騒が顕著であった: 「町には、ただ二つの賑わいしかない、酔っぱらった馬鹿どもと火事だ。」シェークスピアの劇中のフォルスタッフの言動を見ると、「酔っぱらった馬鹿ども」という言葉が妙に真実味を帯びてくる。しかし、筆者とすれば、『ヘンリー4世』の王子の台詞「[金を出せ]と叫んでつかんだものを[酒を出せ]とどなって使い果たすわけだ」(小田島雄志訳: 第1幕第2場 p:420)こそ、酒をめぐる行動として事実に近いと考えざるを得ない。

4. 透明なる悪魔「ジン」がもたらした狂気

「ジン (gin)」という安酒のために英国が崩壊寸前までいったのは事実である。18世紀末に始まる産業革命のはるか以前から、政府と社会全体の怠慢が由々しき問題を醸成していた。農村起源のエール、ビールから都会生まれのジンへの推移こそ問題の核心であった。

Long before the Industrial Revolution, governmental and social neglect were producing grave evils—the uncared-for state of the poor in London and other rapidly growing cities; the want of provision for popular education south of the Scottish Border: the displacing of the Englishman’s time honoured diet of ale and beer by the cheap and deadly gin. (Trevelyan 1973: 622)

ゲルマンの時代から延々と続いてきた節制のない飲み方が頂点を迎えたのが、Gin Crazeと言われる1720年から1751年にかけての時代である。英国の歴史上、この時期ほどロンドンを中心にした英国が酩酊し続けていた時代はない。正史では決して主役になれない都市の貧困層 (urban poor) こそ「ジン狂い」の主役であった。酒も「ドラッグ」の一種であるが、Gin Crazeは1980年代アメリカのcrack流行にも比すべき「近代初のドラッグ恐慌 (the first modern drug scare)」(Solomonson 2012: 45) と言えよう。いやそれ以上に、蒸留酒自体が人間に課せられた「最大の呪い」(Select Committee 1834: Speech of Mr. Buckingham 12)とさえ言えるのだ。遠くたどれば、アラビア人が編み出した蒸留法こそ英国社会を崩壊寸前にまで導いた犯人であるといえよう。一つの科学技術の進歩は、少なからぬ数のゆゆしい問題を引き起こすことがある。

Gin Craze時代のロンドンの状況を簡潔かつ克明に要点をとらえて記述しているのがPicard (2000: 123-125) である。「蔓延」という言葉がこれほど適切な状況はなかろう。同書のp.124を借りて要約的に説明するなら、「ジンはありとあらゆる

る場所にあり、不法な売買は日常茶飯事であり、ナースは子供を静かにさせるためにジンを飲ませ、子供は永久に声を出さなくなる。1751年には9000人以上の子供がジンによって命を絶たれた。強いリキールの常軌を逸した摂取は人間の体をむしばむ。ビールと違ってジンは人間を人間でなくしてしまう。」

Oxford English Dictionary (2nd Ed.) では、ginの定義自体は、客観的な“spirit distilled from grain and malt”となっているが、1714年と1839年の引用例は、いずれもジンのネガティブな面を指摘したものである。参考までにあげておこう。“1714. Mandeville. The infamous Liquor, the name of which derived from Juniper-Berrie in Dutch.” “1839. Carlyle. Gin... liquid Madness sold at ten-pence the quarter.” (下線はいずれも筆者による。) 悪評高く狂気を招く安価な飲み物こそジンであったが、これこそ貧困庶民の切実なる要求にこたえうる唯一のものであった。政府が法律・税制を駆使してジンを抑え込もうとしても、抜け道はいくらでもあった。「安く、すぐ酔える」魅力にかなうものはない。なにしろ、18世紀のdram shopの看板にあるごとく、“Drunk for 1d, dead drunk for 2d, clean straw for nothing” (d= penny) であって、いくばくかの酒手で十分深酔いのできるのだ。

繰り返しになるが、ジンは一国を滅ぼしかねない悪であった。チャールズ・ディケンズの『ボズのスケッチ』(p. 301-2) ではその実態が以下のようにリアルに描写されている。

ジンとショップはイングランドの忌むべき悪である。だが、貧困、悲惨、不潔はそれよりもさらに「悪」である。貧窮者の家庭を何とかしなければならぬ。半ば飢えかかった男たちがみじめであることを忘れようと、一時の救いを求めてジンショップで日銭をはたいている。そのわずかな金でもあれば、彼らの家族に一片のパンを買うことができるというのに。これをやめさせなければならない。このままでは、ジンショップはますますその数を増やし、さらにさらに豪華になっていく。(ディケンズ 2013: 301-302)

英国では子供の飲酒が問題であることは後述するが、同書の挿絵には男性、女性、子供が等しくジンショップにたむろし、ジンとその雰囲気を楽し的に、破滅的に楽しんでいる様子が描かれている。日本流に言えば、けじめがないのである。あたり前になじんでしまうと、若年飲酒も全く問題視されなくなることは目に見えている。同時に注意すべきは、gin palaceがその名の通り、眩さと豪華さにより、ginのイメージが高められ、単なる忘却 (oblivion) の手段から社交上の楽しみ (social sport) とみなされるようになったことである (Solmonson 2012: 68)。

ジンをイングランドに持ち込んだのは初代Earl of LeicesterのRobert Dudleyであるが、決定的だったのは、名誉革命 (Glorious Revolution; 1688) によりジン発

祥の地オランダ生まれのWilliam of Orange が英国王の座に就いたことである。Solmonson (2012: 45) によれば、彼はプロテスタントを奉じてはいたが、無類の「ジン好き」であり、義理の父でカトリックでフランス寄りで「ブランデー好き」のKing James IIを倒して王位に就いたのである。王室でジンが勝利を収めたのだから一般市民社会でも同じ結果になる。

17世紀の終わりごろから18世紀の初めにかけて、ビールの生産は12%ほど落ち込んだがジンの生産は400%の増加であった (Solmonson 2012: 45)。Select Committee (1834: 13)によれば、1686年までは、過度の飲酒に起因する死亡はなかったが、家庭内蒸留が法律上奨励されると過度の飲酒による死亡が激増した。容易に入手可能であることが、悲劇の一つの要因であったと言えよう。市民・労働者の主要飲料としてのエール (ale) の地位が脅かされつつあった。この異様なジンへの傾倒、狂乱ともいえるジン狂いを理解するためには18世紀のロンドンを詳細に理解しなければならない。当時ロンドンの人口は約60万人で、1735年のジンの生産量からすると一人当たり年間14ガロンのジンを消費していた。(ただしこれには、密造酒、密輸酒は含まれていない。) 常識的に計算すれば、25%の人間が完全に酔っぱらっていたことになる (Solmonson 2012: 47)。ジンに狂ったロンドンの悲惨な状況は、人間であることをやめたような人物の崩れきった姿が描かれている既出のホガースの版画Gin Lane等によってビジュアルに理解できる。

Mayhew の *London Labour and the London Poor* 所収の Bracebridge Hemyng “Prostitution in London” (p.473) によると、18世紀末から19世紀初頭において、根拠は様々だが、売春婦の数は人口約100万のロンドンにおいて7～8万人と推定されている。総人口のうちの男性、子供、高齢者を除いて考えてみると、売春婦はおそらく適齢期の女性3人に一人ぐらいとなり、異様に高率である。その大きな原因は、人口過剰と貧困であろうが、そこから安酒に狂ったり自死を選ぶものがないのも何の不思議もない。

1834年の英国議会の記録、Select Committeeによる “Evidence on Drunkenness, Reported to the House of Commons” (1834) を読むと、イギリス議会が飲酒をいかに深刻に捉え、改善の道を模索していたかが窺われる。もちろん議員からすれば、労働者階級の問題に過ぎないかもしれないのだが、それが国家的な問題、国力の衰退を招く問題と認識されていたのは間違いない。文学者、歴史家、芸術家が断片的に捉えている現象を、市井の人の証人喚問という形で、かなり客観的に、明示的に、実証的に記していることは重要である。1834年6月9日 (月) の詳細な記録Evidence of Mr. Mark Moore (同書 1-17、なお、報告書ごとにページが1から始まっているので、注意を要する。) からキーワードを拾って、要点をまとめてみると、ロンドンの飲酒の闇の奥が見えてくる。この日の証人Mark Moore は Southwark-bridgeのシティ側、Queen-street-placeの住人であり、30年以上にわたって労働者階級の人間を見つめてきた。

- ① 過去30年間に酔っ払いが激増した。火酒 (ardent spirit)、犯罪、狂気、貧困が増加した。特に1825年に酒類にかかる税金が下がったときからが顕著である。(p.1, 8)
- ② ロンドンのイースト・エンドで水夫の実態を見る機会があった。ジンショップの裏手にlong-roomと呼ばれる100人～300人収容できる部屋があり、ほとんど夜じゅう営業し、夜ごと、水夫、街の女、ユダヤ人などがたむろしていた。墮落が顕著で、たちの悪い女が水夫の飲み物に薬物を入れてこん睡させ、身ぐるみをはがすことも日常的に行われていた。水夫は飲酒傾向を作り出すとともに、その被害者でもあった。このlong-roomは宿屋 (lodging house) ではなく、最低ランクのパブ、ジンショップで、表通りからは容易に見えない場所で人知れず飲んで騒げるのがみそである。法律に抵触せず24時間営業できる。(p. 2, 8)
- ③ ジンショップにくる男、女、子どもの数を勘定した。ある週、14のハウスに男が142,453人、女が108,593人、子どもが18,391人、合計269,438人が訪れた。Holbornの大きなジンショップには、月曜日には、男が2880人、女が1855人、子どもが289人、合計5024人が来店した。1週間では、16988人が一つのハウスにやってきた。子供の多くは瓶を抱えていて、自宅から親に命令されてジンを買いに来たようである。(p. 3, 13)
- ④ 夕刻をパブで過ごす習慣のために、あらゆる社会的幸福が阻害されている。ぞっとするほどのみすばらしい貧困、家庭の墮落と風紀の乱れ、子どもの教育と道徳的しつけの完全放棄が顕著であり、妻も夫の快楽趣味にあずかろうとする。(p. 5)
- ⑤ 上流階級の飲酒も増加した。最高の酒飲みこそ最高の人物 (best drinker = best man)の思想がみられる。(p. 8)
- ⑥ ここ40年、教育が下層階級にも浸透してきたが、酔っ払いは、教育を受けていない人々に最も蔓延している。(p. 9)
- ⑦ 下層階級が職を得られない主要原因は、大量飲酒である。酒びたりによって人格が破壊され、雇用主の信頼を失う悪循環がみられる。会社・工場の業績が悪化すると、真っ先に解雇されるのは大量飲酒者である。下層階級の道徳的退廃は、宗教・道徳教育の欠如にもよるが、スピリッツの価格がきわめて安いことによって引き起こされている。(p. 9)
- ⑧ 石炭運搬人 (coal-whipper) は飲酒で悪評高い。パブと裏でつながっている雇用主も悪である。一定量のビールを飲まないとい解雇されるのは事実である。飲むのを拒否すると、即解雇され、その氏名が業界に回覧されて、どこも雇ってくれなくなる。パブと雇い主が結託して、船上に持ち込んだビールを飲み干さねばならないシステムが出来上がっている。(p.

10, 11)

- ⑨ 大量飲酒が増加して以来、以前よりも家族の幸福に配慮しない風潮が強まった。(p. 10)
- ⑩ 教育制度は、社会的に酒を減らす有効な手段である。ではあるが、父親は質屋 (pawn-broker) に衣類を、母親は靴とストッキングを質入れして酒手に充てているのが実情で、学校に行こうにも行くことができないし、子どもはその姿、行為を日々目の当たりにしているのが現実だから、うまく機能しない。(p. 10)
- ⑪ パブの経営者が、蒸留会社、醸造会社の支配下にあつて、コントロールされている面がある。(p. 12)
- ⑫ 貧困の4分の3は飲酒から生じ、犯罪も同様であつて、Newgate監獄にくる罪人の99%は飲酒時に罪を犯した。(p. 13)
- ⑬ 子どもの不潔、衰弱、やつれ等は、親・子両方のスピリッツの影響の結果である。ジンショップに出入りする子供は6～16歳で、繰り返し入店する者も多い。1日に4～5回に及ぶこともある。ビンを持っている子と持っていない子の割合は半々である。(p. 13, 14)

近代化しきれていないロンドンのアリ地獄のような悲惨は嫌悪と忌避の対象だが、それを超えて人はそこに「何かがありそうだ」と錯覚して集まる。「ロンドンに飽きた者は人生に飽きた者だ」と言われるぐらいである。農村で恵まれなかった者はもちろん職と賃金を求めて都市に集まる。産業革命が引き起こした田舎からロンドンへの人の移住の結果、労働者過剰により、賃金はぎりぎりに抑えられる。身分的には最下層の困窮者で生活がほとんど成り立たなくても、かろうじて手に入った可処分所得を貯蓄に回す者などいない。何しろ先の見えない生活を余儀なくされている。目先だけの生活 (from hand to mouth) の中で明日のことは考えずに金を使う。それが流儀だ。当時の社会現象の背後には階級の枠組みも決定的に作用していた。上の階級に上がろうとしたりその真似をしたりすると、周囲から分をわきまえない気取った俗物 (snob) として揶揄され侮蔑の目で見られた。富裕層は富裕層で面倒な社会的しがらみがあつたが、それなりに奢侈にふけり、貧困層は不衛生で不健全な境遇に落とし込まれていた。貧困層は確かに「病的にアルコール依存」であつたが、イングランド全体が常にアルコール好きであつたから当然と言えば当然である。

過度の恒常的アルコール消費をもたらししたのは、貧困労働者とその配偶者の現実逃避願望だろうが、それは肉体的・心理的欲求として自然である。ジンは廉価で容易に入手することが可能であつた。つまり、閉塞感にさいなまれていた貧しき者にとって唯一の入手可能な慰めであつた。しかも、ある意味男女平等の世界ともいえるものであつた。上流階級の女性は一人で外を歩くことができなかった

時代に (夫あるいは父親などしかるべき男性によってエスコートしてもらわねばならなかった、独りで歩いたら娼婦とみなされた時代)、dram shopやgin palace などと呼ばれた安酒場では、男女が並んで安酒をあおり、女が「職業婦人として」酒場の経営者になることすら比較的容易にできたのである。ビールやエールとは異なり、蒸留酒であるジンには栄養価はなく、労働上のエネルギーはもたらさなかったが、そんなことは当人にとっては問題外であった。忘却と言う至福の時間だけが彼らが一様に求めたものである。当時のイングランド人の平均的体格が今よりはだいぶ劣ることを考えると (男性で平均168センチ、女性で155センチくらい)、ジンのアルコールによる体への影響は甚大であったろうと想像される (Solmonson 2012: 48)。酒と栄養不足、その他の劣悪な環境のために、英国の労働者は早老と早死が顕著であった。

階層による死亡率の差は大きく、死亡年齢は...専門職・上流階級とその家族で40歳に対し、労働者・職人などでは28歳で、大きな格差があったが、どの都市でも同じ傾向が見られた。労働者たちは虚弱のため兵役検査では不適合者としてはねられるものが多かった。多くの労働者は40歳で働けなくなり、50歳まで生き残るのはわずかだった。(藤本 2000: 26)

飲酒の蔓延には社会的な制約の有無も大きくかわりを持つ。社会道徳的規範が強いと酔っ払って公衆の面前で醜態をさらすわけにはいなくなる。20世紀になると英国では、かなりきつい規範があるが、17世紀18世紀には、酔っ払いにはかなり寛容で、現代ほどの汚名は着せられなかった。なにしろほとんどの人が酔っているのだから、他人のことはとやかく言えない。Trevelyan (1963: 613) も飲酒が「汚点 (blemish)」にならなかったと述べている。金持ちは将来のことなど考える必要もないので考えることなく楽しみや気晴らしのために飲み、明日の見えない貧乏人はみじめな境遇をひと時忘れるために深酒をした。当然のことながら、後者の飲酒は、不品行、犯罪と直結した。

5. 恐るべき子供たち：5歳から酒に親しみ、NHSですら親の監督下であれば15、16歳から飲むことを容認している

少なくとも日本と比較した場合、低年齢層による飲酒が大いなる問題であることははっきりしている。生活習慣病という言葉など使わなくとも、家庭や社会のならわしは「刷り込み (imprinting)」として、体と心に幼児期からしみこんでいく。そもそも、Institute of Alcohol Studies が出している 'Alcohol Consumption Factsheet' の2013年版の統計が、「15歳以上」一人当たりの年間飲酒量が10リットルとなっている。公的に15歳で飲酒できることになる。同冊子のUK Low Risk Drinking

Guidelinesによると、①男性は一週間に21単位(units) を超えて飲むべきではない。一日に飲む量は4単位を超えるべきではなく、2日はアルコールの摂取を避けるべき；②女性は14単位、一日3単位、2日のアルコールなしの日を作る；③妊娠している女性、妊娠を計画している女性は飲むべきではない；④子供は一切飲むべきではないが、飲むのであれば少なくとも15歳になっているべきであるし、一週に1回を超えて飲むべきではないし、親か世話人の監督のもとで飲むべきであり、それでも大人の一日の限度を超えるべきではないとなっている。(下線は筆者による。)

子供が飲むことを前提にしている記述である。一方日本では、家庭であれ、公共の場であれ、一律に20歳未満は飲酒できないと法律で決まっている。もちろん相当数の若者が未成年飲酒をしているのは周知の事実ではあるが、「親の監督下であれば飲んでもいい」という社会的規制の緩さは驚くべきことである。*Independence* をもとにした *Medical News Japan* によると、イギリスではアルコール中毒の治療を受けた子供の数が急増している。2006年から2007年にかけて、40%の増加で記録的な数字になっている。アルコール中毒の治療プログラムを受けている18歳未満の子供の数は4781人(2006年)から6707人(2007年)へと増加し、このうち12-14歳は592人から953人への増加である。これは氷山の一角の数字で、英国では80万人以上の15歳以下の子供が習慣的に飲酒していると見積られる。しかも若者の4分の1は公園や街角で飲酒し、暴れたり、暴力事件が後を絶たない。

「恐るべき子供たち」は、大人になってもアルコールから離れられないし、親子代々社会福祉に依存して生活する悪循環からも抜け出すのは難しい。アルコール関連の治療費は莫大な金額になる。英国社会は子供に始まる飲酒によって蝕まれてる。昔、泣き叫ぶ赤ん坊を静かにさせるために、ジンを飲ませてしまう親がいたことは知られている。多くの場合、そのまま永遠に泣くことをしなくなったと言われているが、無軌道なアルコールの消費は、相変わらず続いている。2007年をピークとしてbinge drinkingがやや減少傾向(男性25%→19%、女性16%→12%；Alcohol Consumption Factsheet 2013, p.14)を示しているのが、救いと言えは救いである。最近パブなどの「外飲み」が減少し、いわゆる「家飲み」が増えているが、これがどのような影響をもたらすかは、慎重に見守る必要がある。パブより値段が安いことと、いつでも酒類が手に入りやすくなったこと、飲酒行動が世間の目につきにくくなるなど、不安の種は尽きない。

6. 恐るべき若者たち：binge drinkingの主役・継承者

子供たちから始まっている飲酒癖が、YOB達によって暴力や反社会的行為へとエスカレートする。子供が酔っぱらっても影響はたかが知れているが、体格、

体力、腕力、多少の世間知を持つ若者が集団エネルギーを發揮した場合、ことはやっかいである。YOBはBOYの逆綴りで、「(粗暴な)若いの、あんちゃん、チンピラ、やつ」といった意味の俗語である。日本語の「不良」と同じく、一昔前は教室の後ろの方や街角で多少の悪さをするような可愛げのあるニュアンスがあった。しかしBingham (2007: 307)によると、英国のyobbishnessの現実にははるかに醜い。彼らの所業には目を背けたくなる。

It's binge drinking, fights after pub closing, knives in schools, teenagers mugging each other for their mobile phones. It's football hooliganism, louts urinating in public, casual vandalism, road rage.

そして、すべてが暴力的・破滅的であることが最大の問題であるが、閉塞感によるやり場のない怒り、飲酒による高揚・興奮が、見境のない行動に走らせている。歯止めがないのである。英国だけではないが、家族関係の崩壊もそれに拍車をかけていよう。また、伝統的な階級社会とは異なる格差社会の現実が重くのしかかっている。17世紀、18世紀のロンドンであるなら、都市化による過密社会の「貧困」とひとくくりにできたであろうが、現代では不況と経済格差、さらには教育格差・出自の差に基づくありとあらゆる格差の負の累積が作用している。しかも思うほど社会に流動性が見られず、よどみから抜け出すのは容易ではない。Gin Crazeのころと同じく、多少の金で、酒をあおって一時「忘れる」以外に処方箋はないと当人たちが思うのも無理はない。ディッケンズをはじめとする文人、画家が描いたロンドンの実態は、現代のロンドンのいたるところに転がっている。

結論

かつてブリア・サヴァランは『美味礼讃』冒頭の「アフォリズム：その四」のなかで、「君はどんなものを食べているか言ってみたまえ。君がどんな人であるか言いあてて見せよう。」と述べた。これを、本論文の趣旨に沿ってパラフレーズするなら、「君たちがどんなものを飲んでいるか言ってみたまえ、そして君たちがどんな飲み方をしているか言ってみたまえ。君たちがどこの国のどんな人々であるか言いあてて見せよう。」となるであろう。人々はのどが渇くから飲み、心が乾くから飲むのだが、ことさら理由がなくとも飲む。これは未来永劫変わらない。酒と酒の飲み方には、集団の個性が表れる。食事を楽しみながらワインをたしなむ地中海沿岸諸国との対比を念頭に起きつつ、英国人の一部の集団の飲酒に関する個性を検証し、英国社会・文化の理解の一助とした。地中海沿岸諸国でもお決まりのように、食前酒、食中酒、食後酒をたしなむが、家族や社交の場で節度を持って (moderately) 飲酒する。Kirby (2013) によると、1980年代から90年

代にかけて、英国にこの種のライフスタイルを導入しようとしたが、うまくいかなかったそうである。周囲も、本人たちも悪習とみなしているものでも、方向を変えることは実に難しい。たとえそれが生命維持に直接かわりがなくても、である。いや、生命維持に直接関係がないから余計にそうなのかもしれない。英国における飲酒問題は根が深すぎる。なお、本論考は英国を不当に貶める意図は全くないことをあえて付言する。文化・社会の一側面に強い光を当てて考察したに過ぎない。

引用文献

- Ackroyd, Peter. 2001. *London: The Biography*. London: Vintage.
- Abel, Ernest L. 2001. "The Gin Epidemic: Much Ado about What?" *Alcohol and Alcoholism* 36(5). Institute of Alcohol Studies. 2013. "Alcohol Consumption Factsheet." London.
- Amis, Kingsley. 2008. *Everyday Drinking*. New York: Bloomsbury.
- Kirby, Tom. 2013. "Liberal Approach Fails to Change Drinking Habits." *The Guardian*.
- キリン食生活文化研究所. 2012. 「2011年世界主要国のビール消費量」キリン食生活文化研究所レポート Vol. 39. キリンホールディングス.
- サヴァラン、ブリア。(関根秀雄訳) 1963. 『美味礼讃』東京：白水社.
- 滋賀医科大学社会学講座公衆衛生学。「研究・調査報告160：Hughes, K. et al. 2011 "Drinking Behaviours and Blood Alcohol Concentration in Four European Drinking Environments: a Cross-sectional Study." *BMC Public Health* 11: 918.」
- シェークスピア、ウイリアム。(小田島雄志訳) 1985. 『シェークスピア全集Ⅱ』東京：白水社.
- Standage, Tom. 2006. *A History of World in 6 Bottles*. New York: Walker & Company.
- スールニア、ジャン＝シャルル. 1996. 『アルコール中毒の歴史』東京：法政大学出版局.
- Select Committee Appointed by the House of Commons to Inquire into This Subject, and Report the Minutes of Evidence, with their Opinions Thereupon. 1834. *Evidence on Drunkenness, Reported to the House of Commons*. London: Benjamin Bagster. (Digitized by Google)
- Solomonson, L. Jacobs. 2012. *Gin: A Global History*. London: Reaktion Books.
- 竹之内謙一. 2002. 『紳士の国の酒のみたち：イングランド酒類販売免許史』東京：文芸社.
- タキトウス。(泉井久之助訳) 2012. 『ゲルマーニア』東京：岩波書店.
- ディッケンズ、チャールズ。(藤岡啓介訳) 2013. 『ボズのスケッチ』東京：未知谷.
- Trevelyan, G.M. 1973. *History of England: The Illustrated Edition*. London: Longman.
- Hitchings, Henry. 2013. *Sorry! The English and their Manners*. London: John Murray.
- Bingham, Harry. 2007. *This Little Britain: How One Small Country Built the Modern World*. London: Fourth Estate.
- Humes, C. James. (Ed.) 1995. *The Wit and Wisdom of Winston Churchill*. New York-London: Harper.
- 藤本武. 2000. 『イギリス貧困史』東京：新日本出版.
- Franklin, Benjamin. 1986. *The Autobiography of Benjamin Franklin*. Harmondsworth: Penguin Books.
- ホフステッド、G. 1995. 『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』東京：有斐閣.
- Picard, Liza. 2000. *Dr. Johnson's London: Life in London 1740-1770*. London: Weidenfield & Nicolson.
- Lyall, Sarah. 2008. "Why are You Brits Such Drunks?", asks one American Writer." *Mail Online*.
- Wright, Joseph. (Ed.) 1962. *English Dialect Dictionary*. Rpt. New York: Hacker Art Books.

ロンドン、ジャック。(行方昭夫訳) 1995.『どんだいの人々：ロンドン1902』東京：岩波。
ワースリー、ルーシー。(中島俊郎、玉井史絵訳) 2013.『暮らしのイギリス史：王侯から庶民まで』
東京：NTT出版。